

## コロナ乗り越え 学業専念を宣誓

### 樽商大で入学式

小樽商科大で2日、入学式が行われ、学部生546人と大学院生42人の計588人が入学した。昨年は新型コロナウイルス禍で式は中止となったが、今年は感染予防のため開始時間を午前と午後2回に分けて行った。



新入生代表としてあいさつをする河森結乃さん

本年度の学部入学者は学部の日間コースが昨年度より21人多い492人で9割超の470人が道内出身者。夜間主コースは54人だった。大学院はアントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）が36人など。午前10時半に始まった式には約300人が出席。新入生のみ出席し、時間を例年より30分短縮した。穴沢

真学長は「大学入学共通テストや新型コロナウイルスによる休校を乗り越えて入学したみなさんに敬意を表したい。時代の流れと変化を觀察し、その先にある未来を思い描ける能力を身につけてほしい」と述べた。入学者代表の河森結乃さん(18)は「学生の自分を守り、学業に専念する」と宣誓した。

(日野夏美)

## 3国立大統合へ 強み集め魅力増したい

小樽商科大、帯広畜産大、北見工大の道内3国立大学が来年4月に経営統合する。国立大3法人の統合は全国でも初めてで、帯広市に新設する国立大法人「北海道国立大学機構」が運営を担う。

商学、農学、工学という三つの分野の単科大学が協力し、新しい研究や教育をめざす。運営の効率化や経費削減も想定する。各校の歴史や実績による多様性を生かし魅力ある大学づくりを図りたい。

最大の課題は3大学の距離だ。最も遠い小樽と北見は300キロ以上離れている。研究者や学生が交流し、研究や教育を深めるにはさまざまな工夫が必要だろう。

地域の課題解決や人材育成への期待は大きい。統合までの1年間で準備を入念に進めてほしい。

統合後も3大学の名称やキャンパス、学長職はそのまま残し、来

春発足する機構の傘下に置く。学生数は計5千人規模に、収入も計130億円規模に拡大する。

事務の効率化によって、統合後の6年間で3億円の経費削減を見込む。民間資金の獲得もめざし、研究や教育に充てる構想だ。

樽商大のビジネスや語学、帯広大の畜産や感染症、北見工大の人工知能（AI）といった強みを生かし、文理融合の研究を進める。副専攻を設けるなど新たな教育プログラムの導入も検討する。

例えば、農学や工学の専門知識を持つ学生が経営学修士（MBA）を取る。そんなユニークな人材を育てることも期待できよう。

自治体や民間と連携し、人口減や高齢化への対応、産業振興などにも取り組むという。18歳人口が減少する中、優秀な学生を広く集めることにもつなげたい。

統合への課題は少なくない。遠距離を克服し円滑な運営を図るには、情報通信技術（ICT）による遠隔講義の充実やサテライトオフィスの活用などが鍵となる。

キャンパスを歩き来する学生や教員への支援策も整えたい。

意思決定の権限が機構に集中すれば、各校が持つ大学の自治を弱めないか。機構トップの理事長は外部招聘するというのが、現場の自発性を尊重する姿勢が重要だ。

統合の背景にある近年の国立天を巡る動きにも留意したい。

2004年度の国立大法人化以降、「選択と集中」を掲げた国は総合大学を予算面で優遇した。小規模大の経営は厳しくなり、統合圧力になったとの指摘もある。

予算を絞って大学の自助努力ばかり求めても、創造的な研究や実りある教育にはつながらない。